

「財界太平記」

第三編 「日本財界に黄金時代来る」

より抜粋

一、戦争成金の花形・鈴木商店

1 鈴木の子か、金子の鈴木か

千載一遇の好機

日本の経済は日清、日露の両戦役で飛躍したのだが、無論戦後には必ず恐慌が見舞つて、戦争中に水膨れした事業をフルイにかけたものだ。そのフルイに残つたものが栄えたわけだが、これまでは大財閥中心に事業の発展をのべてきた。次に筆を歐洲大戦当時の波瀾期に進めたいと思うが、このときはわが国が漁夫の利を得て成金が簇生し、戦後のガラで、泡沫の如く消え去つたものが多かった。

大正三年、大戦の勃発当時の財界は、不況のさ中であつた。岩下清周の北浜銀行が破綻したのもこの年の四月であつた。戦乱の報をきいて初めは株式、綿糸、生糸など急落を示したが、日清、日露の経験から割出して、必ず景気がよくなるとの強気が漸次一般を支配するようになった。そして戦時需要に関係ある海上運賃、海上保険料、石油、小麦粉、砂糖、金属、薬品、染料、紙、硝子、燐寸、煉乳、鉛筆、硫酸、乾物、酒精、石炭、機械などは暴騰を演じた。やがて株式も上騰し、遅れて綿糸布、生糸類もそれに追隨した。

かくて大正七年十一月九日の休戦まで、わが国の財界は異常な活況

巨利を博したのである。

買占めのうち最初に目をつけたのは鉄である。最初は英国、ついで米国の鉄に手をのばした。また造船にも目をつけて、三菱造船所に一万噸級の貨物船を一度に三隻注文して世間を驚かせた。当時川崎造船の松方幸次郎も船舶の昂騰を見越して、海軍その他の注文を断り、専らストック・ボートを作つたが、それに要する鉄は大部分鈴木商店から供給した。松方は約百万噸の船舶を建造したというから、それに要する鉄量は尨大であつた。なお三菱造船、石川島造船、大阪鉄工所等にも鉄を供給したほか鈴木商店自ら播磨、鳥羽の二造船所を経営した。この時の鈴木の子は二億乃至三億と唱えられたものだ。

二丈一尺の手紙

この頃の金子の得意は絶頂で、八面六臂の活動をしたものである。大正六年十一月、須磨の自邸で認めた巻紙二十一尺という長文の手紙をロンドン支店長高畑誠一に送つてゐるが、これが『金子直吉伝』の中に収録されてある。当時の状況を語つて余りがあると思われるので、左に紹介してみよう。

「高畑君に対し 先日御懇書を以て戦争に依る英米財界の変遷を報道せられ、是が確に吾人の法螺袋の一部と成りしを感謝す。尙如斯一般的の報告と共に又専門的、例へば豆が戦争の爲どうなるか、戦後樟腦の需要がどうなるとか斯うなるとかいふ様な報告をも賜はらん事を望む。

「即ち一般的報告も必要には相違なきも、当店の取扱に係るもの乃至日本の商売に係る砂糖、米、豆、石炭、船、樟腦、薄荷等の部分的商品に対する戦前戦後需要の変遷等の報告がより以上必要なりと言

に見舞われ、会社の利潤は大正三年上期の一割四分八厘から、五年下期四割四厘、六年下期六割二分五厘、七年下期には六割三分三厘に上つた（東洋経済調）。特に海運、造船、製鉄等の儲けは素晴らしかつた。内田信也、山下亀三郎、勝田銀次郎等の船成金が世間の話題を賑わしたものだし、素人がいろんな事業に手を出し、また学生でも株を買つて儲けた時代であつた。大正九年のガラで大抵は元の本阿弥に戻るか、或は借金を負つて破綻する者も多く出た。この時代の有様を知るには、最も華やかに活躍した鈴木商店の事績を見るのが手取り早い。

金儲けの鬼・金子直吉

鈴木商店は明治三十五年の設立で、薄荷、砂糖、樟腦、塩、ビール、酒、煙草等の販売と製造を行つていたもので、既に小財閥の形を整えていた。それを切つて廻してゐた番頭が金子直吉である。

さて金子は、大戦の報をきき、その後の情勢を見てみると、黄金の洪水が日本に向つて押し寄せて来るように感得した。男子として緊褌一番すべきは正にこのときであり、この機に乗じて鈴木商店を天下に大ならしめようと決心した。すなわち世界の商品、殊に軍需品は必ず暴騰するに違いないと判断して、会計主任の日野誠義に次のように命じた。『今日以後、鈴木の子の信用と財産とを十分に利用して出来るだけの金をこしらえ、極度の融通をはかつて貰い度い。又如何に行詰るとも、自分の戦闘力を鈍らせるようなことは言つてくれるな。驀地に前進じや』と。

かくてすべての商品、船舶に対して、一齊に思惑買を始めたのである。買占めをはじめて数カ月経つた大正四年の二、三月頃から、果然物価は暴騰をはじめ、景気は立直つた。鈴木商店は一挙に数千万円の

ふに在り。蓋し戦争が終局に進むに随ひ愈々益々必要を感じるものと御承知を乞ふ。小川君の増員を行ふも又ロンドン出張所に如斯余裕を与へんと欲するに外ならず。今小生が聞かんとする所を左に示録せば、今日船舶の黄金時代が戦後まで継続するものとせば凡そ何時まで継続すべきや、戦後運賃界は如何に成行べき乎、砂糖の市況は戦後如何に成行べき乎、戦後における需要供給の状態如何。

「その他米、豆、豆油、魚油、樟腦、薄荷、銅、錫、亜鉛、鉛等に就き現在の状況、及び戦後に於ける需要供給変遷の見込如何等。

「又英米に於ける鉄の供給は戦局の如何に拘らず継続し得らるゝや。戦後に於ける需要供給の見込如何。労銀が戦争の前と今日と、何程の差を生じたるや又戦後労銀の見込如何。造船費用は戦前と今日と又何程の差ありや、戦後は如何に成行べき乎。

「英国における戦前と今日とを比較せる物価表を送られ度し。但し指数に依るものにては駄目也。即ち各種商品の高低表を見て今日迄未だ心付かざりし金儲けの材料を得んとするにあればなり。英国如何に富めりと雖も今日の如き大戦を永くやる時は結局不換紙幣を発行するに至らん。是吾人の最も恐るゝ所、此点に深く注意せられんことを切望す。戦争のため英国の商業は地方的に成りつつ在り、仏米に人を派遣するの要なきや。

「今後は日本米と豆の輸出を盛大にやらんと欲す。昨年の例に依るときは米は満足すべき商売を為したるも豆は甚だ不十分なりし。大いに協力せられん事を望む。豆及び豆油の商売は当地の小寺頗る優勢なり。豆油の如き鈴木商店の輸出は多数の場合にて一回一、二万箱に過ぎざるも、小寺の場合は豆油の満船積商売を為すこと珍らしからざるを以て甚だ羨望に堪へず。或は言ふコンサイメントを為す故如斯多額

の積出をやるもの也と。果して然る時何等浦山敷事なしと雖も、若し然らざる時は商人の大恥辱なるを以て一片の御調査を乞ふ。豆も又現在の取引先にては不十分にして当地大連にて意の如く活動出来ざるを覚ゆ、是も又、特別の注意を払はれんことを依頼す。

「当方にては銅、亜鉛等製煉事業を開始したるに甚だ好結果也。即ち銅は支那の古銭其の他古金類を分離亜鉛と銅を得るに在り。亜鉛と鉛はロシア、濠洲より鉱石を取寄せ、是を製煉しつゝあり。此の事業に對しても有益なる報告と知識を与へられんことを望む。

「船舶、先の帝国丸は他に売却（明年七月六十五万円にて）せり、続いて報国丸も又売らんとす。その代りに一万噸の船二つ、五千噸一つと三千噸一つ今新造中也。一番早き分にて来年八月に出来る。

「小川君持参の砲弾はロシアの注文にて数ヶ月後より製造する予定也。貴地にては仏国其の他より注文を得べし。代価は一箇十八円なり。高ければカウンターオフアーを望む。その他此程の需要品日本にて出来るものは注文を取る事甚だ面白かるべし。是仏国に人を派する必要あらんかと考ふ所以なり。

「今当店の為し居る計画は凡て満点の成績にて進みつゝ在り。御互に商人として此の大乱の真中に生れ、而も世界的商業に従事し得るは無上の光榮とせざるを得ず。即ち此戦乱の変遷を利用し大儲けをなし、三井、三菱を圧倒するか、然らざるも彼等と並んで天下を三分するか、是鈴木商店全員の理想とする所也。小生共是が為生命を五年や十年早くするも縮少するも更に厭ふ所にあらず。要は成功如何に在りと考へ日々奮戦罷在り。恐らくは独逸皇帝カイゼルと雖も小生程働き居らざるべしと自任し居る所也。ロンドンの諸君是に協力を切望す。小生が須磨自宅に於て出勤前此書を認むるは、日本海海戦に於ける東郷大將

で、浅野総一郎や外務省が談判したが、これまた不成功に終つた。

金子は、モリスはワシントンで弁護士や破産管財人などやつていた立派なゼントルマンであることを米国から帰社した鈴木店の店員から聞いたので、そういう人なら誠意を披瀝すれば必ず成功するであろうと考えた。そこで七年二月自ら乗り出して、内務大臣後藤新平の紹介状を貰い、頭本元貞（ジャパン・タイムス）という通訳と長崎英造、石橋為之助、西川玉之助、南治之助、荒木忠雄、浅野良三等の精鋭を引具して米国大使館に赴き、船鉄交換の商議を始めた。

鉄不足で鉄工業が休業状態にあつて、失業問題から思想險悪化の危機にあること、日本は連合国の一員として船舶供給の義務があること、お互いに有無相通じて世界平和に貢献したいこと、など、条理を尽くして説いた。モリスはこれに動かされたようだが、容易にはイエスとしない。金子は自己の店員その他より情報を集めていたから、先方の限度すれすれの条件を出した。無論モリスはそれを蹴つたが、それでは代案という寸法で、とうとう談判成立に漕ぎつけた。

その協定は、米国から鉄材を受取り、日本はその三分の二に相当する噸数の船舶を米国に提供し、その残余は日本の需要に充ててよいという、頗る上首尾のものであつた。これで長い間揉みに揉んだ重大問題は金子の僅か一時間余の交渉で解決した。

金子は神戸の居留地で丁稚小僧をして叩き上がったので、世界中の人間の氣質をよく知つていた。米国人であればニューヨークやワシントンから直ぐ来た者に対しては正直に交渉すれば成功するし、印度、アフリカ、バルカン等未開国を渡つて来たものはスレッツからして仲々懸引が要するというコツを心得ていたので、この厄介な日米船鉄交換問題にも、機略縦横の手腕を発揮して成功を収めたのである。

が彼の『皇国の興廃比の一戦に在り』と信号したると同一の心持也。
大正六年十一月一日 須磨自宅にて 金子直吉 高畑君 小林君 小川君

金子外交の勝利

鈴木商店が鉄と船の大思惑をやつて、大正四年、五年と大いに当てているとき、突如英国政府が鉄の海外輸出を禁止した。これにはわが国の鉄工業者、造船業者は大いに狼狽した。金子直吉は松方幸次郎その他と鉄解禁同盟を組織し、大いに世論を喚起すると共に、外務省に押しかけ、また英国大使に鉄の輸出解禁の交渉を頼んだ。それが奏効して英国は鉄の輸出を解禁したが、後にまた戦争に直接関係あるものを第一とし、然らざるものを後にするという需要先順位をつけたので、わが国への輸出は第三位となり、事実上輸出禁止となつた。そこでやむを得ず米国の鉄のみを以て需要に應じていると、大正六年八月米国もまた鉄の輸出禁止をやつた。この時鈴木商店は約一億円の鉄材買付をやつていたので、その打撃は大変なものであつた。そこでそれまではあまり世間に出なかつた金子も、同業者を神戸のオリエンタルホテルに集めて、鉄解禁同盟会を組織し、自ら委員長を買つて出て活動を始めた。

米国政府を動かして鉄の輸出解禁を行わせようと、神戸に市民大会を開いて反対決議をなし、全国の商業会議所をして反対の決議をなさしめ、その他あらゆる手段を講ずると共に、米国大統領に電報を發したが、何の反応もなかつた。時々刻々、鉄材は不足し、鉄工業は危機に瀕した。政府もほつてはおけず、米国政府に交渉したがラチがあかない。六年十二月に新任の米国大使ローランド・モリスが赴任したの

この協定成功の結果、当初の予算では日本は三億五千万円儲かる勘定であつた。ところがこの協定履行中戦争が済んだので、三十五、六万噸の鉄を米国から受取り百万噸の船舶建造に寄与し、そのうち三十七万五千噸を米国に引渡し、あと六十三万噸の船が残つた。そのうち五十万噸が国際汽船になるという次第で、我国海運界に貢献するところすこぶる大きかつた。

2 鈴木商店焼打事件

朝飯前の米価釣り上げ

歐洲大戰當時は買えば必ず高く売れ、造れば必ず儲かるという商工業の黄金時代であつた。これに反し農村は暗かつた。大正三年は豊作続きで米価は漸落し、十二月には一石十二円にまでおち込んだ。それに加えて商工業の活況のため、農村の子弟は多く百姓仕事を嫌つて農村を去つた。そこで農村を救え、米価を上げろの声が全国におこつた。時の内閣総理大臣大隈重信もその声に動かされて、米価引上策をとろうと考えたが、さてその方法が難しい。こゝに商人金子直吉の知恵を借りること、なつたわけだが、金子は言下に、『米価釣り上げ位は朝飯前の話である。その良策の一は、その筋で定期市場の買方を授けてやること、二は過剰米を海外に輸出することである』と答えた。

大隈内閣は米穀の買上げを行つたが、大正四年は豊作であつたので、米価引上の効果があがらず、五年六月には十三円に低落した。そこで浜口蔵相は鈴木商店に過剰米輸出を命じた。鈴木商店は大阪、兵庫の在米四万六千三十石を建値十一円八十銭で引受けたのを手始めに、大正六年五月十一万俵を建値十五円十一銭で買受けたのを最後に

して、計十五万俵を輸出した。輸出先は主として英仏、革命前のロシア、桑港などであった。

ところが大正六年米作第二回収穫予想が発表されると大正七年度に於いて三、四百万石の供給不足を見る情勢となり、また六年末から世間の様相も変つてきた。景気は下り坂に向い、工業方面に、失業者が現われ始める一面、米価は騰貴に転じた。そこで今度は逆に米価調節のため外米輸入の必要を生じ、また鈴木商店は前後通計百十五万九千六百八袋を輸入した。金子の早業には世人が舌を捲き、また同業者は羨望のあまり、鈴木商店の悪宣伝を始めた。

金子の首に懸賞金

大隈内閣が倒れて寺内内閣となった。全国期米市場の買方の手を縛つて、三十有余の取引所の停止を命じ、また暴利取締令を發布した。収用令を出して農民の米を時価より十円安の三十二、三円で買上げようとしたのも、大正七年夏であつた。しかし都市の在米は減る一方で、米不安は全国に拡がった。

かくて越中滑川の漁師の女房連が、昔からある「毀し方」という最後の手段に出たのがキッカケとなつて、米騒動が全国に捲きおこつたのである。そして米の輸出に最も活躍した鈴木商店は、大阪朝日新聞の煽動的記事が主因となつて、ついに暴徒のため焼打に会つた。その焼打の時の光景を『金子直吉伝』は次の如く記している。

「金子氏が米国大使モリス氏から至急会い度いとの電報が来たので、八月十一日（大正七年）の夜行で上京しようとしてしていると、時の兵庫県知事清野から使が来て至急面会したいというので行つて見ると、奸商が米を買占めするから米価が高くなつた。殊に鈴木商店が無茶苦茶

軍隊が来るまでは、全く無秩序な混乱に陥つていた。

この焼打は、鈴木が政府の命令によつて買占や輸出入をやり、配給にも力を尽くしたのであるが、期米市場の買方や新聞が悪宣伝をしたので、暴徒がそれに乗つてやつたものである。この間の経緯については、鈴木商店の永井幸次郎（戦後貿易庁長官となる）が『米価問題と鈴木商店』と題する一冊に書いている。

引込みつかぬ大風呂敷

大正七年十一月九日休戦条約が成立した。その結果、先ず海運界が不況に襲われ、船価は暴落した。折角船鉄交換で儲けた利益は、大部分吹き飛んでしまつた。茂木は倒れ、久原は傷つき、大小の成金が泡沫の如く消えて行くとき、鈴木は早くより終戦の見込みをつけて商品の処分をしていたのでうまく切抜けることができた。

鈴木商店は戦争中小麦、小麦粉、砂糖等の食料品を買占め、連合国の計画によつて供給していた。戦後も、ドイツの食糧不足を救済する国際間の申し合せがなされたので、米国筋の注文を受けて輸送に當つた。そのほか砂糖、油脂、小麦粉、澱粉等を盛んに買付けて欧洲へ送つて大いに儲け、またロンドンの銀行から信用を得て本店の金融を助けた。当時の高畑ロンドン支店長の活動は誠に目ざましかったものである。また国内では八八艦隊の建造が始まつたので、海軍工廠の注文をとることに努め、北村徳太郎などは佐世保に駐在させられた。因みに大屋晋三は当時ポートサイド駐在員で活動していた。

このように鈴木商店は戦中戦後共に活躍した。大正八、九年の全盛時代には一年の商売高は十六億円に上つたから、三井物産の十二億円を凌いでいたのである。そして鈴木店の稼いだ正貨は数億円に

に買占めるから一層高くなつたのだといつて、湊川の土手の上でうんやの出前持などが昨夜過激な演説をした。今夜も又あすこには皆集るかもしれない。そこで此方は之に先手を打つて米の廉売をやつて解散せしめたいと思うから、金を出して貰い度いとの話。氏はそれに答えて、いくら出したら宜いかお任せする、というとき清野は五万円出せというから承知の旨を答えて帰つて来ると、今度は内田信也がもつと多く出すから、鈴木商店は七万円出せという。これも宜しいといつて、いよいよ車に乗つて三ノ宮停車場へ行くと、途中に貼紙があつてそこらあたりにうさん臭い男が多数集つて見ていた。おかしいとは思つたが気が付かなかつた。その儘汽車に乗つて静岡まで来るとボーイが電報を持つてきた。見ると『イマホンテンヤキウチサル』とある。電報は丸の内から出ている。氏はこの電報を見て考えた。これはつくり東京のゴロツキが悪戯に打つたに相違あるまい。うつかり東京駅へ着こうものならヒドイ目に会うだろうと、コッソリ横浜駅に下車して電車に乗り換え、新聞を買つてひろげてみると、神戸の鈴木商店は勿論、須磨の家まで焼かれて主人も店員もどこへ行つたか皆目行衛不明だという記事が掲げてあつた。

「これには流石の氏も大いに驚き、モリス氏との会見はソコソコに済ませて、その夜神戸に着くと、店員が出迎え、目標があると殺されるかも知れぬと帽子を取換え、バッチをはずさせなどしてひそかに山の手にあつた柳田富士松宅の離座敷に伴われて暫くそこに隠れていた。そして市中の状況を聞くと、毎日掠奪が行われ、金子直吉の首を取つたものには十万円やるといふ懸賞の貼紙がしてあるという。益々危険で外に出られなかつた。」

暴徒に対して官憲は鎮圧する術がなかつた。八月十四日姫路師団の

上るであろうといわれたものである。しかしこうした利潤はもとより多額の借金までして、多数の事業会社の拡張に注ぎこんだことが、抑々後年の破綻を招く原因であつた。鈴木商店が戦時戦後に投資した事業には次の如きものがある。南洋製糖、日本金属、播磨造船（以上大正四年）、日本セルロイド、クロード式窒素肥料、帝国染料、大連油房（大正五年）、台湾炭業、南朝鮮鉄道、東洋ファイバー、浪華倉庫、信越電力、大田川水電（大正六年）、日本冶金、旭石油、大陸木材、東洋燐寸、帝国樟脳、支那樟脳、長府土地（大正七年）、国際汽船、帝国炭業、太陽曹達、米星煙草（大正八年）、帝国人絹、新日本火災保険（大正九年）、東京無線電機、東海製油所（大正十年）。

鈴木商店は九年に五千万円、十二年には八千万円に増資し、他に五千万円の鈴木合名を設立して、財閥の形態を整えつ、あつたが、十一年二月の軍縮会議以後業務日に振わず、毎日借金の整理に追われ、ついに昭和二年四月に破綻したのである。

神戸製鋼と帝国人絹

鈴木商店破綻をめぐるくわしい事情は後にのべるので、では鈴木商店が残した事業を記しておきたい。大番頭金子直吉はなか／＼のエラ物で、その部下は財界に進出し、今日なお活躍しているものが多い。大屋晋三、北村徳太郎、加集益藏、長崎英造、富永能雄、杉山金太郎、高畑誠一等である。こうした人材と共に、神戸製鋼所、播磨造船所、帝国人絹、豊年製油等立派な会社も鈴木商店の遺産として、今日の財界に重きをなしている。

神戸製鋼所は最初小林製鋼所として日露戦役直前に現在の山手工場に建設されたのがその前身である。東京の書籍商小林清一郎がその親

威に当る元呉海軍工廠の小杉技監のすゝめによつて始めたものを、鈴木商店が三十八年の初秋に買収した。四十四年鈴木合名の直営より分離独立して株式会社神戸製鋼所となつたのである。初代社長に海軍少将黒川勇熊、ついで鈴木岩治郎、海軍中将伊藤乙次郎、海軍主計中将永安晋次郎、田宮嘉右衛門、浅田長平と順次かわり、今日は町永三郎が社長に坐つてゐる。第一次大戦中はずとも華やかに活躍し、鑄鍛鋼品を得意とし、大正六年に門司工場（今の神鋼金属）、八年に脇浜の海岸工場、十年には播磨、鳥羽両造船所を買収（今日では分離）した。鈴木商店がこれを引受けた当時は、技術も幼稚であつて、開業式の際にはシーメンス炉からほとんど湯が出なかつたり、またトリベからインゴットケースに流し込むことも不成功で、技師長が大いに恐縮したといふような有様であつた。技術は拙劣、需要は少ないといふわけ、赤字つづきであつたから、一時は三井、三菱に売付けける話もあつたが、それも成らず、やむなく継続したものらしい。それが歐洲大戦で大躍進をとげたのである。

帝国人絹も鈴木が残した大事業の一つである。金子は早くより人造繊維に着目し、明治四十年前後に人絹とセルロイドを製造する目的で播州網干に日本セルロイド人造絹糸という会社をたてた。近藤廉平を社長として事業を始めたが、人絹の方は技術不熟のため後廻しとなつてゐた。ところが東レザールの技師長久村清太がヴィスコース人絹を研究しているが、研究費がないといふことを聞いたので、金子は同学の秦逸三に相談して金を出し、米沢高工の研究室で研究をさせた。そして大正五年に米沢に一日三百封度の人絹製造工場を作り、秦と久村を前後して英米に派して更に研究させ、大正九年ついに帝国人絹を創立したのである。工場を広島市千田町（神戸製鋼所広島分工場内）に設

け、米沢は分工場とした。

折柄高畑ロンドン支店長よりドクター・ドレーバーが人絹の新技術を発明したから、至急技術者を派遣せよとの申越しがあつたので、久村は再び洋行し、ニューヨークでノッツルを買つたり、ロンドンでドレーバーにも会つたが、それほど目新しい發明でもなかつた。丁度その頃日窒の野口遼がロンドンに来ていたので、久村は高畑と共に会つた。野口は人絹をやるなら外国の会社と提携してやろうではないかと説いたが、久村は自信たつぷりであつたので、野口の提案を拒絶して独力で進んだ。野口は独逸のグラント・ストッフ会社と契約を結び、また空中窒素固定でも伊太利のファウザー法の特許を買おうとしていたのである。

かように野口と鈴木商店は、人絹と空中窒素固定事業で相対立することになつたが、帝国人絹は久村式でoshi切り、技術は進み、量産をやり、原価は下つたのである。その後野口の旭ペンベルグを始め東洋レーヨン、倉敷絹織等の人絹会社が出来たが、今日なお帝人の地位は人絹界で揺るがぬものがある。これは鈴木商店の大遺産といつてよい。

その他大日本塩業（終戦により解散）、国際汽船（大阪商船に合併）、合同油脂、クロード式窒素工業（東洋高圧に合併）、豊年製油、太陽曹達、播磨造船等の事業は、すべて鈴木商店の育てたものである。商事部門は現在日商株式会社が継承している。

「北村徳太郎随想集」より抜粋

はなしの漫歩抄

——岩下清周と金子直吉——

三人の敬服する人物

大屋 私は今まで身近に接触した人で、シンから敬服する人物が三人あります。そのうちの一人は鈴木商店の金子直吉で、二番目は、あなたも多少つき合いがあつたと思うが、金子さんの命令で人造絹糸を発明したわしのところの元帝人社長の久村清太、三番目はちよつと毛色が變つて、孫文なんだよ。

なぜ私が孫文を知つたかという、まだ鈴木商店におつた時分、大正八、九年、一九一九年ごろだが、孫文が一週間くらいおつたことがある。その時に孫文を知つた。とにかくセンセエの晩年に十べんくらい会つたが、大した人物だつたね。電氣にパツと打たれるような人物だつた。こつちも青年時代で感受性が強かつたせいもあるだろうがね。

それとちよつと意味が違ふんですがね、お互い金子さんの薫陶を受けたわけなんだが、あなた、どんな思い出がありますか。

北村 私はあなたとちよつと違つた意味で、特に身近に私を指導してくれた人で尊敬する人が二人ある。一人は、私が世の中へ出る出発のときに秘書をした北浜銀行の岩下清周だ。これはまことに豪快な人物でね、金子さんと非常に共通点がある。

この人に最初こき使われたということが、私の人生の一つの大

きな仕合せだつたな。次いで金子さんにいろいろ指導を受けたことが私にとってさらに大きな仕合せだつたんだが、妙なことに、二人とも日本の経済界にパニックを起した火元なんだよ。

大屋 まったく。

筋金のはいつた金子教育

北村 これは実におもしろい。運命といふかなんかしらんが……。もう一つ共通点があるのは、はなしが妙なところへ飛べけれども、岩下清周の息子の壮一さんは早くカトリックに入つて神父さんになつた。それでヨーロッパに留学すること十年くらい、各大学をまわつて、カトリックの学者としてはおそらく最高峰をきわめた人だ。ローマでも有名であるし、フランスでも有名だ。

田中耕太郎博士の最初に書かれた本は、岩下壮一先生にディケートしている。今日田中耕太郎は国際的なカトリックとして有名であるが、その土台を養つたともいえるのが岩下壮一だ。

大屋 オヤジとまるで違ふね。

北村 金子直吉の息子の武蔵は哲学をやつて、ことに日本ではヘーゲル哲学を最高度に昇華した人として有名だ。金子の息子が哲学者なんておかしいじゃないかと人はいふけれども、これは岩下の息子がカトリックの最高の学者になつたのと同じようにおかしいといえはおかしいのだが、私は岩下清周の中に、また金子直吉の中に、たまたま違つた道へ出たけれども、たとえば金子さんなんか商家の小僧にならずに順調に学校へ行つて、そういう世界を歩いていたなら、彼は学者としての金子直吉で世に出たのじゃないか。そういう素質を十分持つておつたと思うね。